

# 「的」論考

高橋 勝 忠

キーワード：形容動詞、形態的緊密性、名詞的形容詞、  
連体助詞の「な」、語レベル

## 1. はじめに\*

従来、「的」接尾語に関する考察が藤井（1957・1961）、山田（1961）、遠藤（1984）、原（1986）、水野（1987）、影山（1993）、山下（1999・2000）、王・曲・林（2001）、北原（2004）等でなされてきた。それらの考察は、語基と「的」の形態的・意味的關係を捉えるものが中心であった。<sup>1</sup> 例えば、水野（1987: 66）の定義に従うと語基と「的」の關係は次のようになる。

- (1) a. 体言類・用言類・結合類の語基と結合し、結合形を相言類とする。  
「～の（ような）性質がある状態」「～する（ような）性質がある状態」（ex. 機械的・圧倒的・本格的）。
- b. 体言類の語基と結合し、結合形を相言類とする。  
「～がある状態」「～が良い状態」（ex. 効果的・魅力的・能率的・頭腦的）

---

\* 本稿は2005年5月15日に関西学院大学ハブスクエア大阪にて開催された第11回 Morphology Lexicon Forum で口頭発表した内容を発展させたものである。会場にて影山太郎、岸本秀樹、村木新次郎の各先生から貴重な質問やコメントをいただいた。また、KLPのメンバーの佐野真樹先生からも示唆的なコメントをいただいた。ここに記してお礼を申し上げる。

1 ただし、影山（1993）は「～的な」の「な」をS構造の音韻部門で導入する屈折語尾として捉え、「的」派生語はS構造複合語として分析する。この辺の事情と問題点については第4節で議論する。

## 「～にかかわる／～の点で」(ex. 技術的・構造的)

水野は「的」が相言類の語基と結合することはあまり多くないことを指摘し、原(1986: 75)も形容動詞であるものは原則として「的」とならないことを指摘する。<sup>2</sup>

本稿の目的は相言類の形容動詞になぜ「的」が添加しにくいかを考察することである。以下、先行研究に基づき、第2節では「的」の形態的機能について語基の種類、語基の単位、語基の要素をそれぞれ述べる。第3節では、「的」の意味的機能について「的」の多義性を述べる。第4節では、「的」の語基制約として形容動詞に添加しにくい理由を探るために、まず藤井(1957)、遠藤(1984)、原(1986)、王・曲・林(2001)の議論を検討する。次に、形容動詞の名詞的性質と形容詞的性質を捉えるために、寺村(1982)の名詞的形容詞(Nominal adjective)と影山(1993)の形容名詞(adjectival noun)の基準に照らして形容動詞の正しい定義を試みる。その上で、連体助詞の「な」が語レベルの「的」の前で形態的に見える状態になり、結果として語彙部門の中に統語部門の情報を取り込む形態的緊密性の違反が生じて形容動詞に「的」が添加しなくなるというMorphological Visibility Condition(MVC)を提案する。第5節では、本稿のまとめを行う。

---

2 形容動詞と「的」との折り合いが悪いことはすでに藤井(1957: 74)で述べられており、「それは意味論上のことで、語法のあやまりを平板的、便利的に指摘することはむずかしい」としている。水野(1987: 63)は相言類の基準として「な」を伴って連体修飾成分となるか、あるいは体言類・用言類・副言類に属さず「の」を伴って連体修飾成分となるもの(ex. 最後)を挙げているが、「最後がベスト」と言えることから格助詞「が」を伴う体言類の文の要素となるのではないか。4節で議論するが、「の」は「的」接尾語の語基が名詞であることを決定する連体助詞で、その語基が形容動詞であることを決定する連体助詞の「な」と区別される。

## 2. 「的」の形態的機能

### 2.1. 語基の種類

「的」の語基として認められるのは(2)に示す4種類である。

- (2) a. 漢語：具体的、科学的、抽象的、基本的、文化的など
- b. 外来語：マクロ的、メルヘンの、コペルニクスのなど
- c. 和語：風見鶏的、鶴的、五月雨的など
- d. 混種語：ハト派的、地滑りの、汎アジア的など

山下(1999: 25-28)によると、通時的に漢語の「的」造語率の割合が他の語種と比べて比率が低くなっていくことを指摘する。すなわち、『中央公論』の雑誌の調査を見ると、1962年よりも1992年の漢語の割合が全体として96.6%から93.6%に下がり、外来語・和語・混種語の造語力とその反面活発になっていることが窺える。しかも、漢語の中でも二字漢語の比率が低くなり、三字漢語や四字漢語(e.g. 族議員的、労働集約的)などの比率は高くなっている。<sup>3</sup>

遠藤(1984: 133)によると、朝日・毎日新聞の社説を20篇調べたところ、「的」の派生語がないものは1篇もなかったそうである。社説では約525字ごとに1回の割合で「的」派生語が使用され、随筆のおよそ4倍、「天声人語」「余録」の約2倍の割合で使用されることが指摘されている。<sup>4</sup>

3 『中央公論』の資料は南雲千歌(1993)、丸山千科(1996)の調査結果の報告である。

山下(1999)の1994年の『日本経済新聞』を対象にした調査では、さらに漢語の割合が86.9%に下がり他の語種の比率がそれぞれ増えている。

4 遠藤(1984: 134)は、「的」の派生語の「な」の付くもの(ナ型、e.g. 「短期的な勝利」と付かないもの(ゼロ型、e.g. 「軍事的状況」)の用例を調べ、新聞や雑誌には紙面の都合上ゼロ型が多く、随筆は逆に柔らかい文体が特徴でナ型が多くなることを指摘する。

## 2.2. 語基の単位

ここでは、語基の種類として漢語に限ってその単位を観察する。山下(1999: 27)は991語の漢語を調べ、(3)に示すような単位と語数と具体例を挙げている。<sup>5</sup>

- |     |                          |              |
|-----|--------------------------|--------------|
| (3) | a. 一字漢語：美的、量的、公的、私的、知的など | 24語 (2.4%)   |
|     | b. 二字漢語：理論的、原則的、伝説的など    | 736語 (74.3%) |
|     | c. 三字漢語：非合法的、反時代的など      | 105語 (10.6%) |
|     | d. 四字漢語：緊急避難的、御意見番的など    | 109語 (11.0%) |
|     | e. 五字漢語：文化人類学的、国家総動員的など  | 11語 (1.1%)   |
|     | f. 六字漢語：芸術至上主義的など        | 6語 (0.6%)    |

圧倒的に単位として二字漢語の割合が高くなっている。しかし、全体的には2.1節で述べたように二字漢語よりも三字漢語、四字漢語などの増加が目立っている。本稿では、形容動詞の二字漢語と「的」の関係について論じる。

## 2.3. 語基の要素

語基の要素は(4)に示すように、語根レベルから文レベルまで広範囲に「的」が添加できる。

- |     |   |
|-----|---|
| (4) | a. 語根：全的、人的、学的、質的など   |
|     | b. 語幹：大々の、致命的、過渡的、先験的など   |
|     | c. 語　：義務的、学問的、共産主義的、社会主義的など   |
|     | d. 句　：二階から目薬的、親方日の丸的など  |
|     | e. 文　：自分には元来文章の素養がないから動もすれば俗になる。<br>突拍子もねえことを云やがる的になる。 <sup>6</sup> |

(4d) (4e)は語彙化されたもので、あらかじめレキシコンの中に登録されて

5 1994年の『日本経済新聞』の資料に基づく。

6 二葉亭四迷の『余が言文一致の由来』が原文。

いる要素と考えられる。影山（1993：326）は（4d）とは異なる「〔ゴルフ界の第一人者〕的人物」という語基の句表現を挙げている。影山（1993：357）によると、語の内部に句が包み込まれる句の包摂というこの現象は、本来なら語彙部門に所属するはずの接辞がD構造にまで進出した結果、例外的に起こったものと説明する。<sup>7</sup>

### 3. 「的」の意味的機能

「的」の意味は第1節で述べたように、相言類の形容動詞的な意味になる。しかし、厳密にみると連体助詞の「な」「の」にパラフレイズできないのが実状である。<sup>8</sup> 藤井（1961：82）は「的」のひろがりすぎた外延として「での」「としての」「への」「からの」の意味用法を挙げている。<sup>9</sup>

- (5) a. 社会的地位（社会での地位）
- b. 社会的問題（社会としての問題）
- c. 社会学者の社会的関心（社会への関心）
- d. 浮浪児に対する社会的関心（社会からの関心）

（5c）と（5d）を比較すると、「社会的関心」の意味が（5c）では動作の帰着する着点（goal）を表すのに対して（5d）では動作の起こる起点（source）を表す。「社会的関心」の修飾語の違いが「的」の意味の違いをもたらすと同様に、藤井（1961：83）は修飾語が同じでも被修飾語が違えば「的」の意味が異なることを指摘する。

7 山下（2000）は句表現として慣用句、スローガンなどの語彙化した用例と句の包摂の用例を多く紹介している。

8 遠藤（1984：130）によると、「的」が一般に使用されるようになった明治中期の『言海』の辞書には「的」の意味として「の」だけしか載せられていなかった。

9 さらに、「的」の多義性については、遠藤（1984：130－132）と山下（1999：34－36）を参照のこと。

- (6) a. 顕微鏡的な視力 = 顕微鏡のようによく見える視力  
 b. 顕微鏡的な存在 = 顕微鏡で見るくらい小さな存在  
 c. 顕微鏡的な特徴 = 顕微鏡のような特徴

藤井（1957：71）は「的」の意味は「らしさ」であり、ある性質をもつこと、ある傾向にあることで、「そのもの」ではないことを以前から指摘し、英文の翻訳の間違いや現代語の「的」が氾濫している事実や「的」の多義性を指摘する。<sup>10</sup> 最近では北原（2004）が「的」表現の誤った語法とその流行る背景として、そのものズバリと言えはいいところを曖昧にしたり、人の言葉を借りて表現したりすることによって、ものごとをはっきり言わないで曖昧にぼやかす最近の風潮があることを指摘する。

#### 4. 「的」の語基制約

「的」は相言類の形容動詞には添加しにくいことを第1節で述べた。この議論をめぐって藤井（1957）、遠藤（1984）、原（1986）、王・曲・林（2001）の各主張と「的」が添加しにくい形容動詞の具体例を挙げると次のようになる。

藤井（1957：74）・・・「的を従えた名詞は、例外なくそのまま形動の語幹になり得ます。そんなわけで同姓不婚というか、すでに形動の語幹であることばと的との接合には溝ができるのです。」（立派、寛大、偏狭、簡単、便利、平板、可能、自然）<sup>11</sup>

10 藤井氏が指摘する英文の翻訳の間違いとして、例えば、*orientation by two values* が「二価値的なものの考え方」は「二つの価値にもとづく考え方」と訳さなければ原文（アーヴィング・J・リー著『言語と生活』、114頁。研究社）の意味が感得できないとしている。その他の具体例は藤井（1961）を参照のこと。

11 藤井氏は「平板的」「可能的」「自然的」は他例と比べると、形動の語幹（＝語基）と的との接合の溝がわりあいに浅いと考える。

遠藤（1984：136）・・・「名詞につけ加えて形容動詞を作るのが接尾語「的」の役割であるから、もともと形容動詞であるものに「的」をつける必要はない。」（満足、有力、平等、深刻、）<sup>12</sup>

原（1986：75）・・・「-的」となるものから、中国語で形容詞用法があり、日本語で形容動詞となるもの、・・・が除外される。」（明確、明白、的確、確実、当然、自然、突然、勇敢、謙遜、嚴重、容易、安全、簡単、微妙、困難）<sup>13</sup>

王・曲・林（2001：10）・・・「非「的」ナ形容詞の中の漢字二次熟語は、「特殊」「静寂」の2つは例外として、a「プラス/マイナスイメージ」、b「主観イメージ」、c「個別イメージ」、d「具体イメージ」という四つの意味論的属性枠のいずれかまたはいくつかに含まれる。」（簡単、便利、有名、不便、明確、自然、複雑、困難、単純、親切、解明、円満、孤独、敏感、周到、明白、重要、危険、微妙、必要、確実、広大、静寂、容易、愉快、強烈、明瞭、正直、的確、簡潔、幸福、特殊、難解、優秀、寛大、得意、非凡、有効）<sup>14</sup>

藤井（1957）、遠藤（1984）、原（1986）は大体同じことを主張している。つまり、形容動詞に「的」が添加しにくいということであり、その理由も形容動

12 遠藤氏は中国系学習者の誤りとして形容動詞に「的」が付いた例を挙げているが、中国語の翻訳には「奇妙的」「不幸的」があり、また山田（1961：61）によるといわゆる形容動詞の語幹には「的」は付きにくいだが、明治前期ではこのルールが確立しないで形容動詞に「的」が付いた「不便的」「未曾有的」「頑固的」などの用例が日本でも見られたことを指摘する。

13 原氏は中国語と日本語で副詞となる「非常」「大概」「忽然」の語基に「的」が付かないことも指摘する。

14 王・曲・林（2001：7）によると、中国人の日本語学習者は日本起源の漢字二次熟語（残念、立派、大変、大切、適切、素直、活発、苦手、裕福）と意味変化型、すなわち字形は同じであるけれども、現代中国語の意味・用法と日本語の意味・用法がずれている漢字二次熟語（元気、大事、適当、綺麗、貧乏、円滑、安易、最高）の例は、「非「的」ナ形容詞と判断できるのでこの調査対象から除外されている。

詞と「的」が同じ機能を持ち、いわば余剰的な表現を避けるために「的」が語基に添加されないということである。<sup>15</sup> しかし、形容動詞でありながら「健康的」「平和的」「自然的」などの表現は可能なので形容動詞の定義をもっと厳密にする必要がある。

王・曲・林（2001）は、「的」が付かない理由として、非「的」ナ形容詞（\*「～的」）の語基のイメージを問題にする。しかし、これは「的」付きナ形容詞<sup>16</sup>の中でニュートラルイメージの強い語として挙げられている語基（社会、抽象、基本、客観、個人、現実、日常、感情、一般、構造、機械など）がプラス/マイナスイメージに変化することもあり、問題である。例えば、廖（1996：76-77）は「感情」や「機械」の意味は評価的には中立になるが（7）のような文の中で「感情的」「機械的」の表現がマイナスの評価へと変わることを指摘する。

- (7) a. しかし、私が、いつもいつも感情的でヒステリックかという、  
       そうでもないのである。（曾野綾子『人びとの中の私』集英社文  
       庫・90年）  
       b. 何よりも、個人の生命維持に必要なかどうかを確かめるなど、個別  
       の場合に対応する努力が欲しい。基準を機械的に適用するだけなら、  
       生活の保護というより、管理だろう。（天声人語・94年1月2  
       日）

「的」接尾語の可能な語基の意味を検討することは本稿の目的ではないが、「的」表現の意味を正しく理解するためには王・曲・林（2001）のように単独

15 ただし、原（1986）は中国語との関連を指摘しており、日本語では形容動詞でも中国語から見た場合に、名詞と形容詞の用法をもつ語基（e.g. 「簡単」「困難」「容易」）は「的」表現が可能となるので、誤って中国人は形容動詞に「的」を添加することになる。

16 王・曲・林（2001：11）は、「的」付きナ形容詞（「～的」）の意味論的属性枠として、「ニュートラルイメージ、客観イメージ、一般イメージ、抽象イメージ」の4つを挙げ、非「的」ナ形容詞の意味論的属性枠と対照的に示している。



に語のイメージだけを問題にするのではなく、寥（1996）が分析するように文脈の中で「的」表現がどのように機能するかを考慮しなければならない。

さて、形容動詞に「的」が添加しにくいことが分かったので、次にこの品詞の正確な定義づけを試みる。形容動詞の存在や捉え方に関して、これまでさまざまな議論があるが、<sup>17</sup> 本稿では形容動詞という品詞があるかどうかには触れず、寺村（1982）と影山（1993）で主張するように、形容動詞は名詞的性質と形容詞的性質を兼ね備えた名詞形容詞的（あるいは形容名詞的）な品詞であると仮定したい。

例えば、形容動詞の名詞的性質として影山（1993：24）は「不-」という接頭辞が名詞や形容動詞には添加するが、純粋な形容詞や動詞には添加しないことを挙げている。

- (8) a. 不 + 名詞       : 不人気、不都合、不規則、不道德  
       b. 不 + 形容名詞 : 不活発、不確実、不完全、不確か  
       c. 不 + 形容詞   : \*不うまい、\*不きれい、\*不重い  
       d. 不 + 動詞     : \*不合う、\*不慣れる、\*不行う、\*不似合う

一方、形容詞的な性質として影山（1993：25）は「-さ」という接尾辞が純粋な形容詞と形容動詞には添加するが、名詞や動詞には添加しないことを挙げている。

- (9) a. 形容詞 + さ   : 美しさ、暑さ、広さ、力強さ  
       b. 形容名詞 + さ : 穏やかさ、活発さ、元気さ、丁寧さ  
       c. 名詞 + さ     : \*名詞さ (cf. 名詞らしさ)、\*巨人さ

17 寺村（1982：54）によると、形容動詞と名詞を含めて名詞とみなし、形容動詞を認めない時枝文法や、形容動詞をナ形容詞、サムイ・アツイなどをイ形容詞と呼び、両者を形容詞の下位類と見る三尾文法などがある。前者の立場は形容動詞の「だ」も助動詞の扱いになる。影山（1993：369）は形容動詞の「だ、で、に」は語であって句ではなく、名詞に続く「だ、で、に」は句であって語ではないことを等位構造の削除規則を根拠に説明している。

## d. 動詞+さ：\*食べさ、\*踊りさ、\*狂いさ

影山（1993：26）は形容動詞（形容名詞）を名詞と形容詞と区別し、且つその名詞的な性質と形容詞的な性質を捉えるために〔±名詞(N)〕と〔±形容詞(A)〕の素性を用いて表す。

- (10) 名詞        : [+ N, - A]  
       イ形容詞 : [- N, + A]  
       形容名詞 : [+ N, + A]

形容動詞を純粋な名詞や形容詞と区別する方法として影山（1993：25）は「-な」が名詞修飾の際に屈折語尾として具現されることを仮定する。

- (11) a. 名詞        : \*犯人な男 (cf. 犯人の男)  
       b. 形容詞    : \*美しい人 (cf. 美しい人)  
       c. 形容名詞 : 穏やかな彼

しかし、この分析は一部の名詞と形容詞には当てはまらないことを影山（1993：368）は指摘する。<sup>18</sup>

- (12) a. 名詞    : 男まさりの/な性格 (cf. 教師の/\*な父)  
       b. 形容詞 : 大きな/小さな問題 (cf. 大きい/小さい問題)

寺村（1982：69-70）も「の」「な」の区別をし、連体形が「～ナ」になる場合は形容動詞（名詞的形容詞, Na）で、「～ノ」になる場合は名詞（N）であると仮定する。

18 影山（1993：368）は（12a）に見られる「の」「な」の揺れは、名詞が名詞的な素性〔-A〕と形容名詞的な素性〔+A〕の値が微妙に変動することによると考える。

- (13) 元気 {ナ,\*ノ} オバアサン  
 親切 {ナ,\*ノ} オバアサン  
 病気 {\*ナ,ノ} オバアサン

寺村 (1982 : 71) は形容動詞と名詞を区別する基準をさらに追加して述べているが、本稿でも形容動詞の正確な位置づけとして (13) の上に、寺村の (14) (15) の基準を採用したい。

- (14) 一般に Na はふつうの形容詞のように、名詞化接尾辞「サ」をつけることができるが、N はできない。  
 (15) Na は一般に推量的様態の「ソウダ」が付き得るが、N には付かない。

(14) (15) の基準に当てはめると、(12a) の「男まさり」は「\*男まさりさ」「\*男まさりそうだ」と言えないので「男まさり」は形容動詞ではなくて名詞と言えよう。寺村 (1982 : 72) は「?無名さ」「?有名さ」の判断に揺れがあるように、N の中にも Na 寄りのものがあること、Na の中にもより N に近いものと、より A に近いものがあることを指摘しているが、「\*無名そうだ」「(?) 有名そうだ」を比較すると「無名」は名詞により近く、「有名」は形容動詞により近いものということになりそうである。

しかし、「的」の語基が形容動詞と言われる「健康的」「平和的」「自然的」の派生語がなぜ可能になるのであろうか。確かに、「健康さ」「平和さ」「自然さ」という表現や「健康そうな/そうだ」「平和そうな/そうだ」「自然そうな/?そうだ」の表現が (16) のように可能であるので、「健康」「平和」「自然」が (14) (15) の基準に従って形容動詞であることには間違いはない。

- (16) a. 心身の健康さ、睡眠をとらないと健康さが失われる  
 何不自由ない平和さ、のどかさ、平和さが伝わってくる  
 日本語の自然さ、素材の自然さが求められる  
 b. 健康そうな歯、健康そうな様子、小麦色の女性は健康そうだ  
 平和そうな顔、平和そうな村、あの国は平和そうだ

## 一見自然そうな髪型、？その解釈が一番自然そうだ

しかし一方で、(17) に示すように「健康な／の」「平和な／の」「自然な／の」の両表現が認められ、(18) のように「健康」「平和」「自然」が他の単語の連用形式と連体形式を受け、<sup>19</sup> 「健康」「平和」「自然」は形容詞の機能と同時に名詞の機能が備わっていることが窺える。

- (17) 健康 {な, の} 水／状態／ダイエット  
 平和 {な, の} 音／文化／国  
 自然 {な, の} 流れ／生き方／食べ物
- (18) 完全に健康な状態、子供の健康を守る  
非常に平和な国、世界の平和を考える  
確かに自然な演技、日本の自然を守る

村木 (1998 : 46) は名詞の連体機能は、多くの場合、関係規定的 (「なにの」「だれの」に対応) であるのに対して、形容詞のそれはつねに属性規定的 (「どんな」に対応) であるという違いが認められることを指摘する。したがって、(17) における「な」「の」の連体助詞はどちらも主要部の名詞を修飾するが、意味の違いが生じてくる。例えば、「どんな水」に対して「健康な水」と答えることができ、「何の水」に対して「健康の水」と答えることができる。形容詞は主要部名詞の属性を表すが、「健康な」が主要部の属性を表せない場合も存在す

19 村木 (1998 : 47) は名詞と形容詞の区別を統語的な機能によって説明する。名詞は他の単語の連体形式をうける結合能力をもつのに対して、形容詞は他の単語の連用形式をうける結合能力をもつと考える。例えば、「試験の 問題」「やさしい 問題」が可能で「\*試験に 問題」「\*やさしく 問題」が不可能になるのは、名詞の「問題」が「試験の」「やさしい」の連体形式と結合し「試験に」「やさしく」の連用形式と結合しないからである。一方、「わたしに やさしい」「少し やさしい」が可能で「\*わたしの やさしい」「\*すこしの やさしい」が不可能になるのは形容詞の「やさしい」が「わたしに」「少し」の連用形式と結合し「わたしの」「すこしの」の連体形式と結合しないからである。村木はこの基準を形容動詞にも当てはめ、形容動詞が名詞と形容詞の二重の機能をもつことを仮定する。

る。

(19) \*健康な薬、\*健康な知識、\*健康な悩み、\*健康な雑誌、\*健康な相談

(19) の用例は「な」を「の」に変えると関係規定的になり正しく派生されるものと思われる。

本稿では、(19) の意味の問題はこれ以上触れず、「健康」「平和」「自然」の形容動詞は名詞と形容詞の2つの機能があり、「健康的」「平和的」「自然的」の派生語は名詞の機能をもつ語基に「的」が添加して生成されると仮定する。したがって、形容動詞に名詞の機能がなく形容詞の機能だけを有する「簡単」「便利」「容易」「複雑」などの語基に対しては、「的」が添加できないと仮定する。

形容動詞に「的」が添加しないのは意味的な理由であることを4節の最初のところすでに言及した。本稿では(20)のようなMorphological Visibility Condition (MVC) を仮定し、それによって形容動詞は形態的緊密性<sup>20</sup>に違反し「的」に添加できなくなるという形態的可視条件を提案したい。

(20) 形容詞の機能のみ有する形容動詞は連体助詞の「な」が語レベルの「的」の前で形態的に見える。

(20) が意図することは、形容動詞に語レベルの「的」が添加する場合、例えば「\*簡單的」は「\*簡単な的」と形態的に「な」が見えるようになり、統語部門の連体助詞（屈折語尾）の「な」が語彙部門の中で姿を見せる結果、統語的要素の排除という形態的緊密性に抵触し、「\*簡單的」が許されないということである。(20) は、実際は「\*簡單的」の「簡単」と「的」の間に「な」が見えるわけではないのできわめて心理的・認知的な感覚作用である。また、(20) は語レベルの「的」の前で適用されるのであって語幹レベルの「化」「性」「さ」の接尾語の前では適用されないと考える。なぜなら、「化」「性」「さ」の場合は

20 形態的緊密性については影山（1993：10, 325）を参照のこと。

「的」より語基とのつながりが強く、語基との間に音声的なポーズも生じないので、連体助詞の「な」が見えなくなると仮定する。結果として(21)の派生語を許すことになる。

(21) 複雑化、明確化、重要性、確実性、滑稽さ、積極さ

影山(1993: 15-19)によると、語形成の組み合わせとして語根レベルから語幹レベルに、さらに語レベルに階層化され、語が派生される。「的」は語レベルの接尾語なのでそれより小さい語根レベルの形態素や語幹レベルの形態素と結合して「心的」「知的」・「心理的」「知覚的」を生成することもできる。「簡単」自体は、独立して現れないので語幹ということになるが、「簡単な」は語の資格をもつことになる。<sup>21</sup> その意味では、(20)における「な」は「的」の語レベルの接尾語の前で見えていなければならない。また、見えていると仮定すると「な」は形容詞を表すので「的」の範疇の選択(category selection)違反にもなることに注意したい。表面的には見えないが、形容動詞の「な」が形態的に存在していると考えられる2つの根拠を挙げてみよう。

1つは、連用修飾語の「すこぶる」や「はなはだ」が「な」を介さず形容動詞を修飾できるということが挙げられる。

(22) すこぶる簡単、はなはだ親切、\*すこぶる病気、\*はなはだ本当

(18)で述べたように、副詞の「すこぶる」や「はなはだ」が名詞の「病気」や「本当」を修飾できないのは名詞が連用形式と結合できないからである。一方、形容詞はこれらの連用形式と結合できる。したがって、「簡単」「親切」は「な」を伴った形容詞の機能をもっていると考えられる。

21 本稿では形容名詞の「な」は統語的要素として分析する。ただし、二字漢語ではない形容詞(e.g. 穏やかな)の「な」は語彙的要素として考える。

もう1つは、形容動詞の語基の複合語が形成されないという事実から「な」の存在が窺える。

(23) 元気な生活 (\*元気生活)、確実な話 (\*確実話)、簡単な内容 (\*簡単内容)

影山 (1993 : 374) によると、(23) の複合語が許されないのは単純形の形容動詞 (形容名詞) は屈折語尾の「な」がなければ形態上、述語であることが明瞭にならないからであると説明する。しかし、この説明は (22) における形容動詞が「な」がなくても副詞と結びつき述語の機能を果たすことができる事実と矛盾することになる。また、この説明は屈折語尾の「な」があると確かに「元気な生活」が示すように述語の機能は明瞭になるが、影山 (1993 : 375) は、この「な」が統語部門のサイクルの中で与えられる統語的色彩の強い屈折語尾として捉えているので「\*元気生活」のS構造複合語の成立不可能な理由として、「元気な生活」の句表現を用いた説明をしていることになる。しかし、「\*元気生活」のS構造複合語がなぜ形成できないのかを考える場合に、(20) で仮定したように形容動詞の語基の後ろに「な」の連体助詞が見えると仮定するならば、「\*元気な生活」のように複合語レベルの中に統語レベルの「な」が心理的に姿を現す結果、形態的緊密性の違反により「\*元気生活」が排除されるという自然な説明が可能となる。同様に、「\*優雅生活」「\*豊富知識」という表現もS構造複合語において統語レベルの「な」が介在し、形態的緊密性の違反により排除されるものと思われる。<sup>22</sup>

影山 (1993 : 372 - 375) は「な」に関して、通常の形容名詞と違う分析を「的」形容名詞に当てはめて考える。

(24) a. 庶民的な性格

22 「複雑骨折」「健康保険」などの表現は語彙的複合語となり、S構造複合語とは異なるアクセント型をもち、「な」「の」は介在しないものとする。

- a'. 庶民的：性格
- b. 積極的な指示
- b'. 積極的：指示

影山によると、「な」は構造格の「が、を、に」と同様の標示として捉え、具体的な形態は音韻部門で与えられると仮定する。したがって、(23) と異なり (24a, b) の表現は、屈折語尾の「な」を落として、(24a', b') と言い換えることができ、(24a, a') と (24b, b') は実質的な意味の違いは皆無であると仮定する。(24a', b') はS構造複合と同じアクセント型を伴い発音されるのでS構造複合語として生成されると仮定する。

ここで気になるのは (24a, b) がS構造複合語ではないのに (24a', b') と同じ意味が与えられる点である。影山はその根拠を「な」がS構造の音韻部門で与えられるので統語的色彩が薄くなるという理由に求めている。確かに、「的な」と「的」表現の間に意味の差は殆ど感じられない (24) のような場合が存在するが、しかし、(25) が示すように「な」が有るか無いかで多少なりともニュアンスが異なり、(26) が示すように「的な」表現と「的」表現が平行して用いられない場合があり、「な」の存在が何らかの意味の違いをもたらすと考えられる場合が存在する。

- (25) 男性的な行動、男性的行動  
女性的な性格、女性的性格

- (26) 家庭的な女性／妻／店 (家庭的な女性／?妻／\*店)  
驚異的な人物／人たち／人 (驚異的な人物／?人たち／\*人)  
魅力的な国家／国々／国 (魅力的な国家／?国々／\*国)  
実用的な会話／話し方／(お)話 (実用的な会話／?話し方／\*(お)話)  
古典的な書(物)／本 (古典的な書(物)／\*本)  
男性的な男性／女性／男／女 (男性的な男性／女性／\*男／?女)  
女性的な男性／女性／男／女 (女性的な男性／女性／?男／\*女)



(25) の各表現をウェブページで検索したところ、「的」表現の方が「的な」表現より圧倒的に数が多いことが分かった。例えば、「男性的行動」は約4,000件ヒットしたのに対し「男性的な行動」は33件しかなかった。同様に、「女性的性格」は約5,000件ヒットしたのに対し「女性的な性格」は132件しかなかった。ウェブページの検索数は日によって多少変化するが「的」と「的な」表現の割合はあまり変化しないものと考えられる。<sup>23</sup> また、意味を見てみると「男性的な行動」と「男性的行動」の基本的意味は変わらないにしても「男性的な行動」は女性について言及する傾向があり、一方「男性的行動」は男性について言及する傾向があるようである。同様に「女性的な性格」は男性について言及する傾向があり、一方「女性的性格」は女性について言及する傾向があるようである。これらのことを踏まえると、「な」は単なる音韻表示ではなく、何らかの意味をもつ統語的要素であり、したがって「的な」表現は句構造を構成し、一方「的」表現はS構造複合語と言えよう。

(26) は「的な」と「的」表現が異なることを示す。特に、「的な」が和語と結びつくのに対して、「的」は和語と結びつかないようである。例えば、「古典的な本」と言っても「\*古典的本」は不自然である。漢語と結びつく場合は「古典的書籍」「古典的名著」など問題は生じない。同様に、「男性的男性」「男性的女性」と言っても「\*男性的男」「?男性的女」とは言いがたい。「な」が和語を結びつける機能をもつものに対して、「的」は漢語を結びつける機能がある。したがって、「的な」は和語と漢語との結合が許され、「的」は漢語のみの結合が許されるものと思われる。

(25) (26) の議論をまとめると、「的」と「的な」表現は必ずしも同じ意味にならないことである。その1つの根拠は両表現が同じ意味をもつと仮定するなら使用頻度もほぼ同じであると予測されるがその検索数にかなりの相違が見られる点である。もう1つの根拠は「な」に影響されず両表現が同じ意味をもつと仮定するなら語種の影響も受けないと予測されるが「的」表現には和語と

23 ただし、「家庭的な女性」は「家庭的な女性」よりも使用頻度は高くなっている。

結びつかない制約が見られる点である。

以上のことから、「的な」の「な」はS構造の音韻部門で与えられるのではなく通常の形容名詞と同じように統語的屈折要素として考えるのが妥当であると思われる。

- (27) 兄は単純（で）、弟は複雑だ。  
 兄は親切（な）、弟は活発な女性が好きだ。  
 兄は幸福（に）、弟は不幸になった。
- (28) 兄は積極的（で）、弟は消極的だ。  
 兄は健康的（な）、弟は理知的な女性が好きだ。  
 兄は積極的（に）、弟は消極的になった。

したがって、(27)の形容名詞は影山（1993：371）が挙げる(28)の「的」表現と平行して捉えられ、「～で／な／に」はどちらも句を構成すると考えられる。それゆえに、「親切な女性」「健康的な女性」は句表現として自然に捉えられる。また、「で／な／に」は統語要素であるから(27)(28)において削除されることも可能である。また、(22)や(27)(28)のような統語的環境において「で／な／に」が心理的に見えてくると考えられる。<sup>24</sup>

しかし、形容名詞のS構造複合語形成において、「な」は心理的に見えてくると形態的緊密性の違反となり、(23)の複合語（e.g.\*簡単内容）は排除されるこ

24 影山（1993：369）はaの文において「に」が省略できるのは「医者」が名詞で「医者に」が句を構成し、bの文において「に」が省略できないのは「元気」が形容名詞で「元気に」が語を構成するからであると説明している。

a. 私になりたいのは医者（に）だ。

b. 私になりたいのは元気\*（に）だ。

しかし、aとbの文の容認性の違いは分裂文の制限から生じるように思われる。すなわち、aとbの文を分裂文とみなすと、分裂文は強調される要素は動詞や形容詞はこないで「元気な」の変異形の「元気に」が選択される。「\*元気(な)だ」が構文上排除されることから格助詞の「に」が義務的に選択されると仮定する。したがって、「に」は語の要素ではなくcとdのように副詞句を構成する要素であると考えられる。

c. 医者に、私になりたいのだ。

d. 元気に、私になりたいのだ。

とになる。(26)の「的」に関するS構造複合語は、特に和語との結合において(e.g. \*家庭的店)、「な」が心理的に見えてくると仮定すると形態的緊密性の違反となり排除されることになる。一方、漢語との結合においては(e.g. 男性的行動)、語基との結びつきが強く、「な」が見えてこないものと考えられる。影山(1993: 373)は(29)のようなS構造複合語の「的」が副詞要素と結合可能であるとみなしているが、<sup>25</sup>容認できない。なぜなら、二字漢語(性格・指示・活動)と「的」の結びつきは和語よりも強く、「な」が見えてこないと考えられるからである。もし、(29)が可能であるとみなす人はS構造複合語としてではなく、「的」のあとに「な」を想定する句表現としての再解釈を行うからであろうと思われる。

- (29) ?たいへん庶民的：性格  
       ?非常に積極的：指示  
       ?極めて精力的：活動

以上の議論をまとめると、連体助詞の「な」が「的」表現において心理的に見えてくる環境は次の2つの場合であると結論づけることができる。

語レベルにおいて

- 1) 「的」の前に形容詞の用法のみ有する形容動詞(形容名詞)がくる場合  
       (e.g. \*簡單的、\*複雑的)

S構造複合語

- 2) 「的」の後ろに和語がくる場合(e.g. \*古典的本)

また、心理的に見えてこない環境は次の2つの場合であると結論づけることができる。

25 影山(1993: 373)は(27)の程度副詞を付けた句表現を許すようになるのは、S構造複合語において名詞句を取り込むように(e.g. [その会社]:訪問の際に)、「的」表現にも句の取り込みが平行して考えられることを主張する。

語レベルにおいて

- 1) 「的」の前に名詞がくる場合 (e.g. 機械的、健康的)

S構造複合語

- 2) 「的」の後ろに漢語がくる場合 (e.g. 古典的書(物))

## 5. おわりに

遠藤 (1984 : 138) によると「的」は中国語の助辞の用法にならって明治初期の翻訳文のなかで、英語の-ticなどの形容詞的な語の訳語として、二字の漢語につけて用いられ出してから学術的文章などに多く用いられたようである。本稿では、二字漢語の形容動詞に「的」が添加しにくい理由を探ってきた。「な」の連体助詞をめぐって「的 (な)」の後の要素との関連も見てきた。「な」を二字漢語の語幹要素あるいはS構造の音韻要素として捉えるのではなくて統語要素としてみなすことにより、共通に「的」表現が形態的緊密性の違反として捉えられることを主張してきた。しかし、本稿では「的」の語基としてどのような名詞が意味的に選択 (semantic selection) されるかについては触れてこなかった。例えば、原 (1986 : 79) で指摘するような「永久的」「国際的」「部分的」「全体的」とは言えるが、「\*永遠的」「\*海外的」「\*一部の」「\*全部的」とは言えないのはなぜか。<sup>26</sup> また、英語のどのような派生接尾辞と「的」接尾語が意味的に関連するかについては触れてこなかった。プログレッシブ英語逆引

26 原 (1986 : 79) は意味的に範囲を規定するかどうか容認性の違いをもたらすと考えている。例えば、「部分」「全体」はいずれも範囲を規定するが、「一部」「全部」は数量を表し範囲を規定しないので「的」が付加されないと考える。しかし、「\*一流的」「\*最悪的」「\*最高の」は「的」の語基の意味がある範囲を規定するように思われる。したがって、原の意味基準からは「的」表現が認められることになるが、実際のところ「的」は付加されないのが問題となる。「(?)永久化」「国際化」「部分化」「全体化」とは言えるが、「\*永遠化」「?海外化」「\*一部化」「\*全部化」「\*一流化」「\*最悪化」「\*最高化」とは言えないことから「的」の語基の意味が「化」接尾語と関連しているように思われる。

き辞典（1999）によると、「的」の日本語訳が付く英語の接尾辞は-tic（e.g. fantastic「空想的な」）以外に、-istic（e.g. artistic「芸術的な」）、-ative（e.g. continuative「連続的な」）、-ive（e.g. distinctive「示差的な」）、-ous（e.g. automatic「自動的な」）、-ful（e.g. deathful「致命的な」）、-able（e.g. amicable「好意的な」）、-some（e.g. adventuresome「冒険的な」）、-al（e.g. occupational「職業的な」）など多くに見られるが、「的」の意味に一番ふさわしい英語の接尾辞は有るのか無いのか。これらの議論に関しては今後の課題として残したい。

### 参考文献

- 遠藤織枝（1984）「接尾辞『的』の意味と用法」『日本語教育』53号, 125-138. 日本語教育学会.
- 王・曲・林（2001）「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」『山口国文』第24号, 1-21. 山口大学人文学部国語国文学会.
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.
- 北原保雄編（2004）『問題な日本語』大修館書店.
- 國廣哲彌・堀内克明・樋口信也編（1999）『プログレッシブ英語逆引き辞典』小学館.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタックスと意味I』くろしお出版.
- 原由紀子（1986）「-的 -中国語との比較から-」『日本語学』第5巻第3号, 73-80. 明治書院.
- 藤井信雄（1957）「的ということば」『言語生活』71号, 71-76. 筑摩書房.
- 藤井信雄（1961）「的の意味」『言語生活』119号, 80-83. 筑摩書房.
- 水野義道（1987）「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻第2号, 60-69. 明治書院.
- 村木新次郎（1998）「名詞と形容詞の境界」『言語』27巻3号, 44-49. 大修館書店.
- 山下喜代（1999）「字音接尾辞「的」について」『森田良行教授古希記念論文集』24-38. 明治書院.

山下喜代 (2000) 「漢語系接尾辞の語形成助辞化 - 「的」を中心にして -」  
『日本語学』 第19卷13号, 52-64. 明治書院.

山田巖 (1961) 「発生期における的ということば」『言語生活』 120号, 56-61.  
筑摩書房.

寥小梅 (1996) 「「～的」語形の評価義試論」『専修国文』 58号, 73-89.